

ともだちと『おはなしタイム』

—養護学校小学部の実践から—

講師：長野県飯山養護学校 石澤妙子氏

1. 飯山養護学校概要

長野県飯山市にある小・中・高等部で構成される知的障害養護学校。平成3年の開校時は50人規模だったが、平成27年度は94名になり、知的障害、ダウン症、自閉症などの児童と、肢体機能障害や、てんかん発作、心臓などの内部障害の多様な児童・生徒が在籍している。施設規模に対して在籍数が多くハード的に大変なこともあるが、小さな学校だからこそ皆が名前呼び合えるといった良い面もある。

小学部では、「生活単元学習」に重点を置いている。これは、季節や生活の変化に根ざした児童の関心・興味をもとにした生活上のテーマに沿って、子どもたちが主体的に取り組めることを大切にしながら教科の枠を超えて進める学習であり、身体と心を育てる大切な時間になっている。

2. 「おはなしタイム」の取組み

テーマを設けて児童の日常生活や学習活動に生きるような絵本を選書し、読み聞かせや手遊びを行っている。いろいろな先生が関わりチームティーチングで実施。

なぜ普通のおはなし会のようにみんなで床に座って聴くのではなく、授業のように1人ずつ机とイスでおはなしを聴くかという、低学年だと「居場所」があった方が落ち着けるため。学年が上がるにつれてだんだん無くても大丈夫になっていく。

プログラムは「①てあそび」「②おはなし」「③べんきょう」といったようにカードの一つずつ書き、順番に並べてホワイトボードに貼って終わったものからはがしていく。そうすることで、児童自身が、次に何をするのか、あと何が残っているのかが目でみて理解できるため安心する。

多様な児童がいるので、それぞれが親しみやす

く模倣しやすい歌や手遊び、ハンドサイン、擬声語、カウントダウンなどを取り入れながら行っている。自閉症児は相手の気持ちにとっても敏感である。おはなしをする自分が不安を抱えていると子どもにも伝わるため、「嬉しい、楽しい」と感じながら取り組んできた。ちなみに、自閉症の子が内向きにバイバイをするのは、相手からしてもらったバイバイを自分が見たままに真似するからそうなる。また、自閉症児は変化に弱いのも特徴なので、プログラムは一週間を目安に繰り返し行いつつ、紙芝居、大型絵本、大型テレビ（絵本の場面をスライドショーで写す）など様々なものを使い、児童の反応によって少しずつ変化を加えている。パネルシアターやエプロンシアター、ペープサートなどを用いると、繰り返し経験することで慣れた児童は操作に参加することもある。

具体的な選書の例としていくつか。例えば春に『ぞうくんのさんぼ』を取り上げ、水に落ちる表現から、暑くなる時期の水遊びへとつなげた。夏には『ありとすいか』を選び、親子レクでプールのスライダーで遊んだり、スイカのうちわ作りする制作活動につなげたりする広がりもあった。

3. 外部機関との連携で広がる読書活動

本と親しむ機会を広げるために、講談社の『全国訪問おはなし隊』を本校に招いたり、校外学習で市立飯山図書館へ訪ねる機会を設けたりした。

また、おはなしタイムで使う紙芝居やペープサートなどは絵本を拡大コピーして自作しているものも多いが、大型絵本やテーマに沿った絵本はなかなか学校で揃えられないため、そんなとき公共図書館は大変役に立つ。今回講師の話をいただいたのも日頃、県立長野図書館から相互貸借で本を借りている縁からということもあるので、少しサービスについて紹介してもらいたい。

（県立長野図書館担当者から相互貸借制度の概要紹介）

4. さいごに

飯山養護学校にも図書はある。視聴覚室や各部の集会室に誰でも手にとれる形で置いてあるが、図書館ではない。小中学校で図書館司書の先生と一緒に仕事をして感じたことは、子どもと本の出会いをつくるのはやはり司書だということ。図書館はそういう人がいつもいる空間であることが大切だと思う。自分自身も子どもたちと本との出会いをこれからも作り続けていきたい。